

諫早市こどもの城
実績報告書 Vol.12

～それでも親子は成長を続ける～

令和2年度

「それでも親子は成長を続ける」

令和2年度、こどもの城は12年目の年を迎えました。しかし、世界中を巻き込んだ新型コロナウイルス（以下、「コロナウイルス」、または「ウイルス」）の感染の影響を受けて、普段の様子は大きく様変わりしました。そんな中で、こどもの城を利用して成長を続ける子どもたちや保護者も多くおられます。今回は、こどもの城の近況や、考えさせられたことについて、お報せしようと思います。

第1章 「コロナウイルスとこどもの城」

コロナ禍？

コロナウイルスの情報が毎日、メディアによって流されていますが、その度に「コロナ禍」という言葉を耳にします。この「禍（か・わざわい）」という言葉は、これまで日常生活であまり使われていなかったように感じますが、今では、多くの方が理解して使われています。辞書で調べてみると、【禍】傷害・疾病・天変地異・難儀などをこうむること。悪いできごと。不幸なできごと。災難。（出典：広辞苑、岩波書店）とあります。まさに、すべての解釈が当てはまるような時代になったように感じます。そして、例に漏れず、こどもの城にもその影響が及びました。

令和2年2月末に国の緊急事態宣言が出され、こどもの城は、初めて、疾病による臨時休館を余儀なくされました。平成21年、こどもの城一年目の冬には、新型インフルエンザの流行により、12月頃、一時的に利用者が激減したことがありましたが、休館には至りませんでした（興味深いことに、この時期にこどもの城を利用されていた方々は、ほとんどインフルエンザに罹患することがなく、少ないながらも、毎日のように利用されていました）。これまで、自然災害の影響によって臨時休館することは多々ありましたが、未知のウイルスによる休館に、その時々でのベストなあり方を模索することが求められました。

約2か月の休館の間、県外在住の家族と接触した一部のスタッフを除き、他のスタッフは休まずに、周辺自然環境の整備、教育や福祉に関する自主的な研修、そして国民への特別給付金の支給事務などを行いました。早く感染が収束することを願いつつ、これまでの業務の中で、なかなかできなかったことを見つけ、力を溜めることを選択しました。

その後、世界的にも、少しずつウイルスに関する知見が得られ、感染が下火になるとともに、感染対策を講じたうえで再開できることとなりました。まずは、屋外の活動のみ利用できる時期があり、利用対象も諫早市民のみ、長崎県民のみと段階を踏み、6月22日、利用者数や時間帯を制限しつつも、ついに館内利用を再開することになり（対象を制限して）、開館して初めて、予約制による利用方法を選択しました。令和2年末現在も予約制は継続されています。予約による慣れない利用方法は、知らずに来

館された方に対して、お断りをしなければならぬなど、難しい運営が付きまといまいます。しかし、今は、未知のウイルスに対して、社会全体で対策を考える時期だととらえて、苦渋の決断をしなければなりません。その決断の先には、児童施設として大切な視点があります。それは・・・

このような中でも、子どもたちは日々、成長を続ける

ということです。そして、子どもたちだけでなく、親も成長を続けるという視点です。そのために、今も、屋外での自然体験活動はもとより、ものづくりなどの創作活動、親向けの子育て相談なども実施をしています。夏に取材されたテレビ局の報道では、利用者がインタビューに答え、「開館してくれて自然体験ができ、ありがたいです」、「こどもの城を信頼して利用しています」などの声を聞くことができました。「禍」の時代でも、できることはありますので、今後もアイデアを出していきます。

昨年の今頃を思い返すと、こどもの城では、人々はマスクを着けずに来館していましたし、熱を測らずに館内に入れました。一日に2回の「手洗いタイム」はありましたが、まだ、コロナウイルスの脅威をそれほど感じることもなく過ごしていました。時には、一日千人を超える来館者もあり、日曜祝日には、互いに手を取り、肩を抱き、大きな声で歌い踊っていました。「禍」と表現されたコロナウイルスは、晴れた空に突然起こる雷のようで、まさに青天の霹靂（へきれき）とも言うべきものです。しかし、社会全体として、子どもたちの成長を止めたり、あきらめたりすることはできません。「禍」という字が使われたことわざに、「禍福は糾（あざな）える縄の如し」というものがあります。禍と福は、縄のように交互にやって来るといような意味です。「コロナ禍」ではなく「コロナ福」という言葉は当てはまりませんが、「禍」を「福」に変える視点は、持ち続けたいと思っています。

接触手法と感染対策

これまでのこどもの城における代表的なコミュニケーション手法には、直接接触がありました。赤ちゃんを（ずっと）抱く、プロレスごっこでぶつかり合う、手を取り合う、肩を組む……。いつしか、それが、こどもの城の特徴となり、子どもたちの愛着形成や成長の面からも、親に対する支援の面からも重要ではないかと思われるようになりました。今でも、そういった手法を求めて来られる方も少なくありません。

しかし、コロナウイルス感染拡大に伴い、これまでのコミュニケーション手法を見直す必要が出てきました。「ソーシャル・ディスタンス」と言われる身体的な距離の確保が大切であるとの知見が示され、さらには大声を出すことさえも感染防止に向けて避けなければならないこととして広まりました。かつて館内に響いていた大きな歌声は、今は、聴こえません。知らない人でも肩に手をかけ、一列の“列車”を作って館内を歌い歩き回っていた景色は、今は、見られません。その景色を見るだけで、多くの言葉でこどもの城を説明するより、こどもの城がどんなことを大切にしている場所であるかを理解できたものです。したがって、感染対策を講じながらも、今は、少し手法を変えて利用者とのコミュニケーションを図るようにしています。

一つのヒントがボディアクション（身体表現）にあるのではないかと思います。米国の心理学者のメラビアンさんによれば、言語そのもので相手に伝わるのは7%で、他は声の調子、視線、ジェスチャー

など非言語の要素だそうです。顔にマスクを着けて表情の見えづらにこの機会に、非言語のコミュニケーションについて、利用者とともに考えることができればと思います。

椎の実～自然からの恵み

晩秋から初冬にかけて、こどもの城の周辺は、椎の実がたくさん落ちています。感染の波によっては、利用者が少ない日もありますが、開館以来、屋外での自然体験活動を勧めてきたこどもの城では、日々、利用者を屋外に誘います。屋外は、ともすれば密室となる屋内に比べて、感染のリスクは低くなるのではないかと思います。寒さの中でも、利用される親子が、椎の実を拾い、炒って食べるという景色が見られています。自然と共生し、自然からの恵みをいただくことで、畏敬の念を抱いたり、自然と共に暮らすことの重要性に気づいたりできるかもしれません。今年度は、近隣の国立自然の家と「キャンプの日」という共催事業を実施していますが、意外に参加者が多く、もしかしたら、感染拡大を契機に、屋外の自然体験が少し見直されたのかもしれないと感じています。

第2章 「出前や団体利用あれこれ」

前章では、コロナウイルスによって予約制の利用になったこどもの城のことについてふれました。しかし、元々、こどもの城は、諫早市民を含む「団体」という形で事前予約して利用（または諫早市内に出前）することができます。この章では、今年度を実施された団体の活動について紹介しようと思います。

中学校の人権学習

コロナウイルスの感染が拡大しようと、児童生徒の学びは止まりません。今年度も、いくつもの学校から出前の依頼があり、スタッフが学校を訪問し、授業を行いました。そのうちの一つの中学校では、感染が下火になった時でしたので、午後の授業の前にクラスに入り、生徒といっしょに給食を食べさせていただきました。既に知見が得られているように、食事場面は感染のリスクが高まるようなので、感染対策を十分に講じた配慮をしたうえで給食を体験させていただきました。学校の給食と言えば、5～6人で班を作り、机を寄せ合って食べる風景がよく見られるものです。しかし、感染対策の一環で、当該中学校では、全員が前を向いて給食を食べ、無言で食事をするという風景に様変わりしていました。思わず、おしゃべりをしてしまう生徒に対して、前で食事をしている担任の先生が、「しーっ！」と人差し指を立てて注意される場面も何度かありましたが、概して、生徒は感染対策を受け入れて、互いに配慮しながら食事をしていました。中には、スタッフに飲み終わった牛乳パックのたたみ方を教えてくれる生徒もいて、なんだか「ここにおいて（居て）いいよ」と言われた気がしました。給食後の昼休み時間も生徒とともに過ごしたのですが、このように、依頼された授業の前の時間を生徒と過ごすことで、スムーズに授業に入っていくことができるのです。人権学習では、「自分がクラスみんなのために何ができるか。また、何かをしようとしている人に一人一人が応援できることはないか。」ということテーマとした活動を行いました。給食～昼休みを生徒と共に過ごした効果があったのか、生徒たちは積極的に活動に取り組みました。

別の中学校では、感動的なできごとがありました。この中学校では、普段から学年を越えた縦割りで表現活動に取り組んでいます。スタッフが依頼されたのは校内の人権集会での学習でしたので、人権というテーマと表現活動をリンクできないかと考えて授業を展開しました。体育館に全校生徒が集まる人権集会では、生徒は「やらされている感」がなく、自ら互いに距離をとって並び、挨拶も気持ちよいものでした。集会では、人権委員の生徒が、本を読みながらでなく、表情豊かに詩を誦んじ、人権意識を高めるために実施したアンケートの結果を全校生徒の前で堂々と発表していました。あらためて、諫早市内の中学校で素晴らしい教育が展開されているなど感じました。

そういった生徒たちであったため、事前の予定になかったのですが、スタッフが普段の表現活動を見せてほしいと生徒たちに投げかけてみました。生徒たちはあまり躊躇することなく、その場で、これまで練習してきた「ソーラン節」の踊りを披露してくれたのです。目の前で、中学生が団結して、一糸乱れぬ踊りを披露してくれると、やはり感動してしまいます。しっかりと表現できる、あるいは表現していいんだという風土が醸成されていることは、人権意識の高まりに繋がると確信しました。そして、第

1章でもふれましたが、マスクをつけた生活が続く中で、自己を表現したりコミュニケーションを図ったりすることは、ますます重要な視点になるのではないかと感じました。

親子のレクリエーション

今年度は、こどもの城に事前予約をされていた団体が、感染のリスクを考慮してキャンセルされる事例が相次ぎました。市外・県外にスタッフを講師として派遣する予約も同様にキャンセルになった事例が相次ぎました。このような事例は、こどもの城だけでなく、幼稚園や保育園、PTAなどでも同様のようです。感染が下火になった秋に、「運動会など園行事ができなかったので、なんとか保護者が主催して、集まる機会を作りたい」と、ある保育園の保護者から相談があり、予防対策を講じたうえで、こどもの城にて親子のレクリエーションを企画実施することにしました。

内容は、親子で簡易にできる自然散策で、プログラムの最後に、それぞれ園児が見つけた“秋”を発表するというものでしたが、最初に集まったときの保護者の少し緊張した顔つきと、最後に嬉々として子どもたちが発表する姿を微笑んで見つめている顔つきは、明らかに違うものでした。

ただ、感染のリスクを考慮して、今回は家族単位で自然散策を実施しましたが、本来は、よその保護者と園児がペアを組んで実施したいところです。家族ごとに実施する手法から、他の親子とふれあえる社会が、一時も早く戻ってくることを願うばかりです。

親のグループ・カウンセリングという学び

コロナウイルスの感染対策をしながら学んでいる人たちの例として、最後に、親のプログラムを紹介します。

こどもの城では、以前から「誰もが参加できて、その日に解散する」形式の親のグループを受け入れてきました（過去に、「いさはや子育てネット」に記事を掲載しています）。多くの団体が実施をとりやめる中、学びたいという気持ちで企画され、場を創って来たグループがあります。以前は、こどもの城がモデルとして8回シリーズで提示してきた内容に沿ってプログラムを展開していましたが、今年度のグループは、回ごとに自分たちでテーマを考え、こどもの城が内容をアレンジするという形で実施しました。

特筆すべきは、コロナウイルスの感染拡大に伴って定着してきた、いわゆる「新しい生活様式」に関する内容でした。この、「新しい生活様式」によって、子どもや他の親とのコミュニケーションにおいて、“変わったこと”について、いくつかの事例から、参加者がスタッフとともに考えるという内容でした。

約10人の参加者がありましたが、第1章で述べたように、ボディアクションを意識するようになったことや、マスクをしていて聞こえにくいので、少し高いトーンで喋るようになったなどの事例が紹介されました。そんな中で、興味深いことに、「世界はつながっているんだなと感じた」、「人にやさしくできるようになった」ということを語ってくれた参加者がいました。折しも、心無い偏見などによって感染された方やその家族を傷つけるような行為が社会問題として浮上してくる中での学び合いでしたが、

今ある暮らし、様式が変わってしまっても、そこに「誰かのお陰」があるということを参加者みんなで気づき合った学び合いでした。

この章では、こどもの城を活用して学んでいる事例を紹介してみました。未知のウイルスが人々の暮らしを変えていってしまう中、それでも親も子も学びを止めないことは、一筋の光に見えます。こどもの城は、親も子も学ぶ場所です。学ぶことは、コロナウイルスに向き合う一つなのかもしれないと感じた親たちのプログラムでした。

第3章「あらためて『生きる力』を考える」

前章までは、コロナ禍においても、学びを続けている大人や子どもたちの姿についてふれました。こどもの城は、子どもたちが「生きる力」を培うことを目的とした学びの施設ですので、このような時代でも成長を続ける人々を応援していきたいと思います。本章では、あらためて「生きる力」について考えてみたいと思います。

不確実なこと

平成8年の中央教育審議会答申において、「生きる力」という概念が出され、学校でも、また学校外でも、「生きる力」を意識した教育が展開されてきました。こどもの城も、そういった時代の流れの中で、平成21年3月に開館しました。

しかし、「生きる」という言葉と「力」という言葉を組み合わせた「生きる力」について、どれだけの人々が深く理解しているのか、あるいは理解しようとしているのか疑問に感じることがあります。時には、教育に携わる人々までが、十分な理解がなされておらず、漠然と受け止めているのではないかと感じることもあります。かくいう、こどもの城のスタッフも、同様の場合があります。既に、平成8年から20数年が経ち、当時の調査で体験不足だと言われていた子どもたちは、現役の子育て世代の親になりました。あらためて、親や教師などの教育関係者と「生きる力」について、会話したり、意見交換したりすることは、価値あることではないかと思えます。

そこで、一時的に受入を中止していた期間に、普段なかなか深めることができにくい「生きる力」の概念について、スタッフ研修会を開催しました。そこでは、スタッフが理解することと同時に、利用者と普段の言葉で会話する場合の有効な手段は何かを探ることとしました。

その一つが、AI (Artificial Intelligence=人工知能) との対比ではないかと考えました。平成8年当時、まだAIという言葉が、日常会話の中で聞かれることはほとんどありませんでした。また携帯型の通信機器も人々に普及していませんでした。しかし、今では囲碁のトップ棋士がAIに敗れたという事例があり、トップ棋士どうしの対局でもAIが示す手を参考にしている棋士も多いと聞きます。将棋と異なり、勝ち方が複数ある囲碁においては、AIが人間に勝てることはないといわれていた時代もありましたが、それは覆されました。

では、AIにできず、人間にできることとは何でしょうか。このことを考えてみると、「生きる力」について、少し深めることができるのではないかと思うのです。AIができないことの一つが、不確実なことだと思います。AIは、命令・指示されたことには忠実に、速く、しかも正確に答えを見つけ出すことでしょう。前述した囲碁のAIは、「次の手」の勝利確立を複数示します。が、不確実なことをしない(できない)のです。一方で、人間は不確実なこともやってみようとする場合があります。屋外で活動している時の一場面ですが、子どもたちは水たまりの中に足を突っ込むことがあります。まるで、興味に駆られたのかのように水たまりを避けないどころか、嬉々として足を突っ込むことがあります。その結果、水が周囲の人に跳ねたり、長靴の中に水が入ったりして、親から叱られることもあります。時に微笑ましいこの光景において、親にとっては「また洗濯しなきゃ」という“確かな近未来”が予測で

きますが、子どもたちにとっては「どうなるのかな、やってみたい」という不確実なことへの興味が勝っているかのようです。このような子どもたちの行為は、命令・指示されたことではなく、衝動的、否、自発的にさえ見えます。かつて、コンピューターが自らの意思を覚醒させ、人間と戦う「ターミネーター」という映画がありましたが、現実には、AIが自ら意思を持って命令・指示された以外のことを起こすことはありません。その点、人間は子どもの頃から自発的に様々な周囲の環境に働きかけることができます。さらに、少し年上の子がいる場合などは、「だめだめ。水が跳ねるから、こうやってよ。」と水が跳ねないやり方を教えるなど、協力場面が自然発生することもあります。

屋外での自然体験活動のできごとで、AIができそうにないことをもう一つ紹介します。子どもたちが枝や石で何かを地面に描いている光景に出会ったことがあります。スタッフがのぞき込むと「ドラえもん！」などと言って得意気な顔つきをしていました。何かの衝動に駆られたかのように、創造して自己を表現していたのです。スタッフには、どうしても、その造形物がドラえもんには見えていないのですが、「ドラえもんだ〜！」と応じていました。自ら表現したことに共感しようとしたからです。

このような幼少期の体験を重ねながら、水たまりに足を突っ込むとどうなるかという仮説を立てたり、繰り返し失敗したり、どうすれば水が飛び跳ねないかということのを他の人に確かめて検証を繰り返したり、時には何かを創造したりすることが、自ら考え、よりよく行動する力の原点になるのではないかと思うのですが、いかがでしょうか。

探求すること

現在、こどもの城で一番若いスタッフの年齢は、24歳です。中央教育審議会で「生きる力」について答申された平成8年生まれ的女性です。スタッフ研修会で、彼女が6年前まで受けていた高校での教育法の一場面について、話題になりました。彼女が在学していた高校では、通称「千本ノック」という名の勉強法が生徒に課されていたそうです。在学中の3年間に、千枚の数学のプリント課題が教師から出され、それをより速く正確に解くことが生徒に求められたそうです。あくまでも一場面なので、その勉強法自体に異論を唱えるつもりはありませんが、より速く正確に解くことは、先述したAIの方が、どうやら人間より優れているようです。したがって、その勉強法で留まっているとすれば、変化の激しい時代の教育としては、何らかの物足りなさがあるように感じます。先輩スタッフから、『「生きる力」一期生なのにねえ』とからかわれていましたが、彼女には、「千本ノック」が強烈な印象として残っていたそうです。

しかし、今年度、彼女が卒業した高校の生徒から、「授業で、課題研究をしているので、情報提供してほしい」という旨の連絡がありました。どうやら、数人のグループに分かれて、自分たちで問題を見つけ出し、探求していくという学習のようでした。問い合わせしてきた生徒達の問題は、子育て支援策についてのものでしたが、生徒達は仮説を立て、情報を得て、検証していくという筋道に沿って探求型の学習を展開していたようです。秋になり、大学の卒業論文のような形で、成果をまとめたものを送ってくれました。6年前の卒業生であるこどもの城のスタッフが言うには、自分たちの頃にはなかったとのこと。彼女が在学中にやっていた「千本ノック」は、与えられた問題を解くことです。一方、今年度の高校生の学習は、自分で問題を発見することです。問題が常に与えられる学習法は、解くことだけが

求められますが、問題を発見するという過程からの学びは、考えようによっては、より難しいことかもしれません。そして、先述したA Iにできないことかもしれません。

A Iも自己学習ができるそうですが、まだ自分で問題を発見して、自分に課すことはできないようです。「生きる力」を培うために、学校でも学び方の手法が増え、変わってきていることを感じたできごとでした。

未来を創造する

令和2年の元日、諫早ケーブルテレビは、市内在住のある少女のドキュメント番組を放映しました。少女は、長崎県立盲学校に通う道辻結那さんです。前年の秋ごろから、同放送局以外にも、複数のメディアが彼女を取材するために、こどもの城を訪れました。

道辻結那さんは、3歳くらいの頃から、何度もこどもの城を利用していましたが、音楽が好きになったきっかけは、こどもの城でスタッフがギターを弾き語りすることだったそうです。初めておぼえた歌は、こどもの城オリジナル曲だったそうで、スタッフがプレゼントした音源を毎日聴いておぼえたそうです。いつの頃からか、歌を歌って人を喜ばせたいという願いを抱いた彼女は、ピアノを習い、小学校5年生になった今でも、こどもの城に来て利用者の皆さんに弾き語りをしてくれます。こういった経緯もあり、彼女の取材のためにメディアがこどもの城を訪れるのです。ちなみに、元日に放映されたドキュメント番組は、全国で賞を受賞しています。

11月のある日。長崎県更生保護女性連盟研修会が諫早文化会館で開催されました。感染対策のために、座席の間隔を空けての大会でしたが、会場には約200人の参加者がありました。その大会で講演を依頼されていたこどもの城館長とともに、彼女はステージに立ち、集まった方々のために、懸命に弾き語りをしました。指で鍵盤を探しながら音を奏で、お腹の底から響く発声で会場を魅了していきます。彼女の歌声とピアノの演奏で、会場にいた人々の目頭が熱くなったと聞きました。

今、これまで世界が経験したことのないウイルスと向き合っています。かつて経験したことがないということは、あらかじめ正解が用意されていないということです。これからの未来を生きるために、まさに自ら考え、よりよく行動することが求められています。そんな中、子どもたちが成長を止めずに、自己を表現し、正解のない（正解がたくさんある）ことを楽しみながら成長し、未来を創造するということを、大人も感じたステージだったように感じました。

未来は明るい。そう信じて、こどもの城は今後も「生きる力」を培う場でありたいと考えています。